

2014 October
vol.3

たたび たたび



001		Tinnitus vol.3
002		Contents List
003	010	Kaito TAKEUCHI
011	016	Naomi MINAMI
017	018	Yuki TAKAGI



テーマについて

僕は自分からあまり遠くへ出かけることがない。なにか旅行というものが苦手で、旅先で何をしたらいいかわからなくなるからだ。なにかと遠い国に行く機会があったが、それこそ何かをしに行く機会と理由があったからで、特になければ自分の知っている土地をぶらぶらしている方が落ち着く。

その点写真は厄介だ。写真を撮めたのは大学に入ってから。バイト代で買ったリコーのコンデジで好き勝手に撮ってた。写真を撮るのが面白くて、夜に原チャでどっかに行ってみたり、授業の合間に海に行ってみたり、カメラを持って外にでることが増えてしまった。何か新しい場所に行ってみたい、ついでに写真も撮りたいと思うようになってしまった。

趣味ではじめた写真というのも、日頃のストレス解消と言ったら単純に聞こえるかもしれないけど、違った頭の使い方をすることが楽しくて気持ちよかった。次第に写真につられていろんなことを考えるようになった。徐々に景色にイメージが湧いて、多くを見ているようで、見えていないような感覚になる。写真のお陰で、頭のなかでもたびに出るようになってしまった。

僕は写真を撮って後悔している事がある。物理的に遠出するようになってしまった。何かと時間とカネがかかる。しかもカメラを持つことで荷物が増えている。こんなに大変なことはない。そこで最近ではカメラを持ち歩かなくなった。荷物が軽くなって色んな所に行けるようになった。またカメラが必要になった。

10月10日 竹内海人











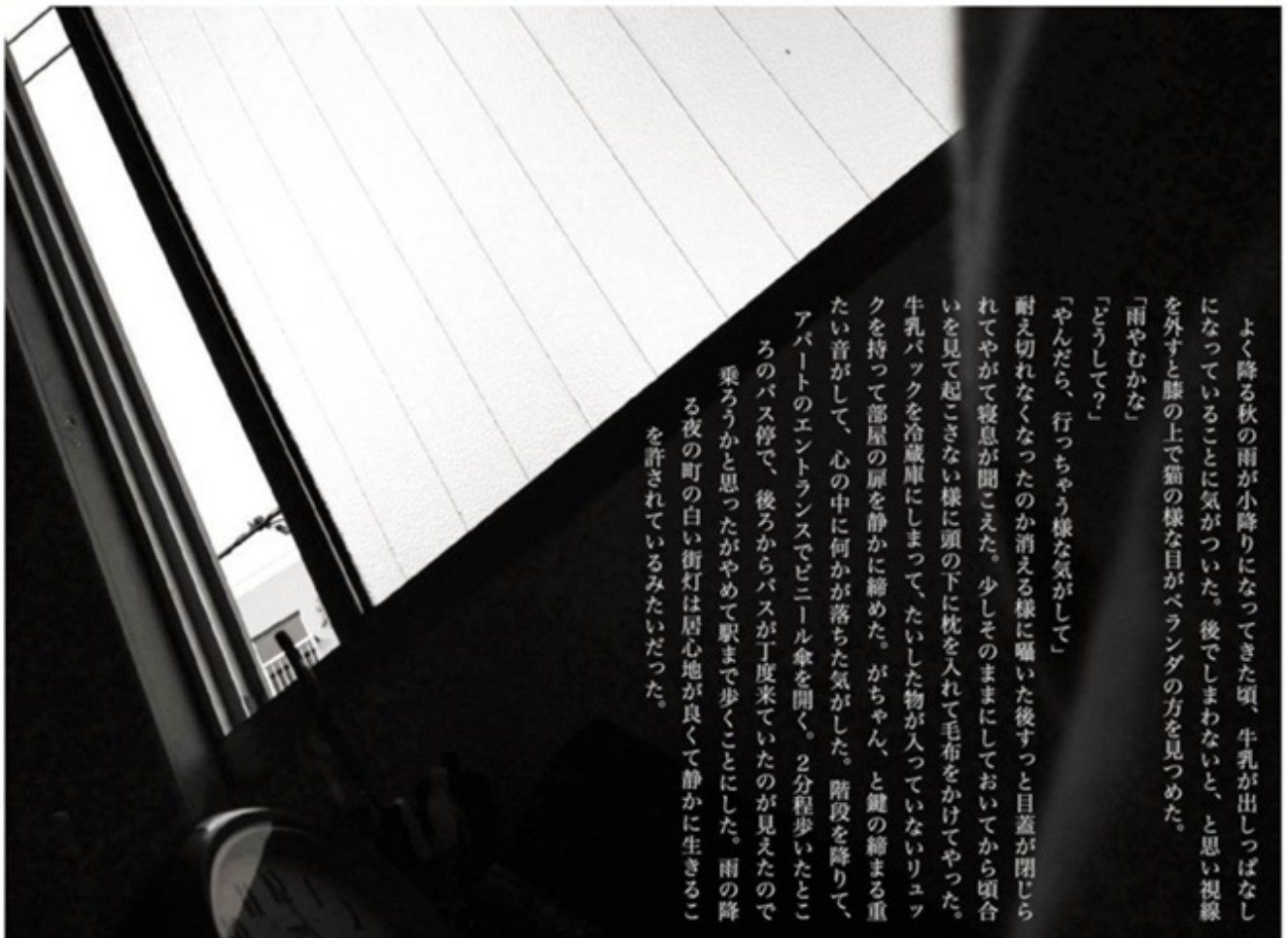




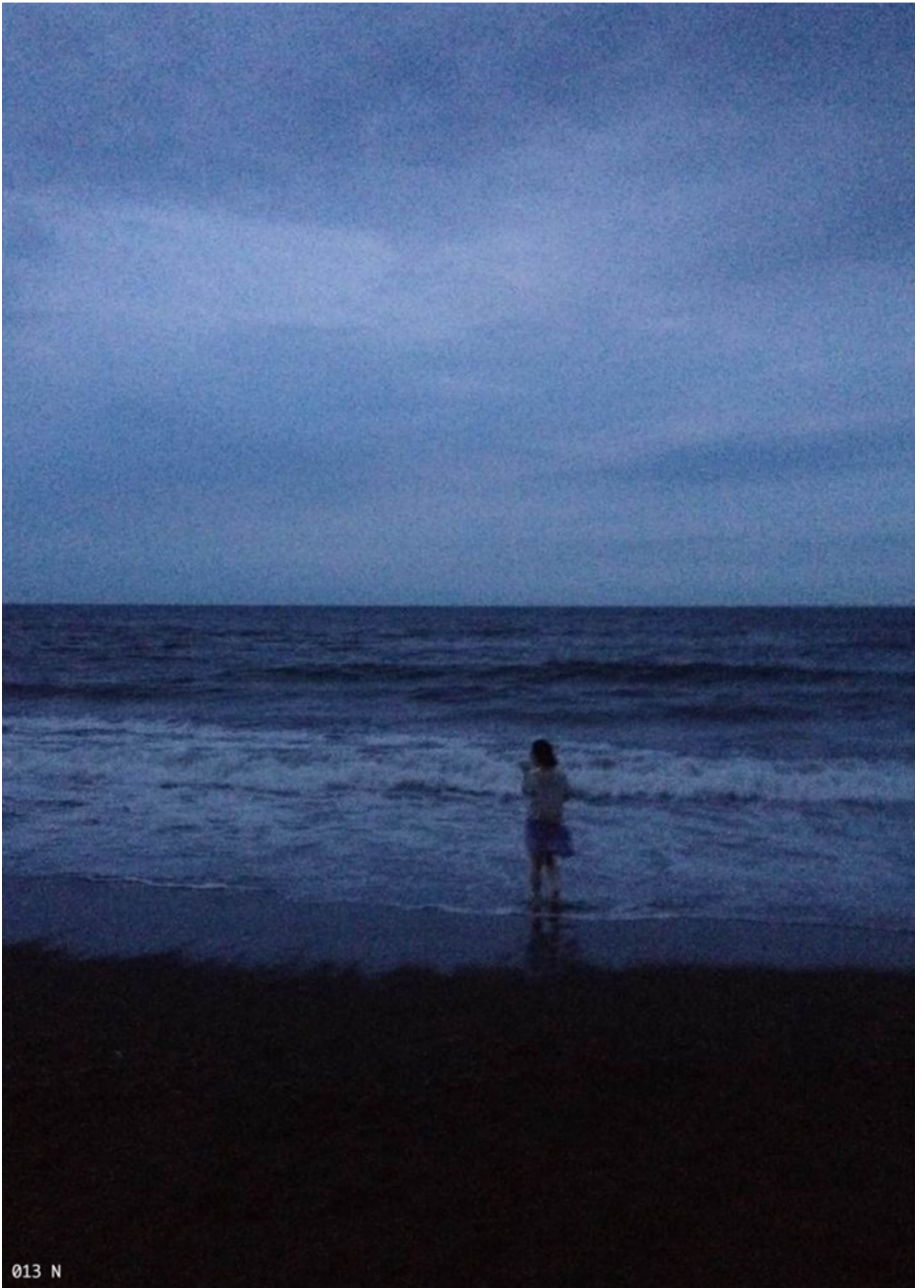


+innit+45









もう嫌だな、と確かに思ったのは久しぶりかも知れない。大抵のことは我慢できてしまうし仕事だからと諦めつくことばかりだった筈だが、今日遂に蓄積した疲労とそれに付随するあらゆる感情が混ざってどつと押し寄せてきた。

「少し休暇取った方がいいんじゃないの？」

家に遊びに来ていた悠里にそう言われた。テーブルには作り過ぎたから、と自作の色とりどりの惣菜が並んでいる。いつもこの時間だとお腹も空いていてすぐに白飯を茶碗によそっていただきます、と食べ始めるところが今日は食欲すら湧かない。今まで恋人と別れた時だつて受験に失敗した時だつてご飯を食べられないなんてことは無かつたのに今回はいつもと違つた。試しに箸を進めてみても一口入れたところでもう無理、と食道が受け付けなくなつてしまう。ご飯を食べられないことがここまでしんどいことだと思わなかつた。

「お休みするべきだね、重傷」

「そうかもしれない・・・」

どうしちゃつたんだろう私。最近の過去を思い出す。原因。思い当たるには色々有り過ぎて、それらをすべて無視してきたと言えれば完璧に否定はできない。

「まあ、そのうち元気になるでしょ」
へらへらと悠里に笑つてみせた。訝しげな視線がこちらに注がれる。それ以上は追求されることなく惣菜が彼女の胃の中へ消化されていく。私はお茶を飲んでテレビに視線を移す事で空気を濁した。

「そういうえげ」

ふと悠里が何かを思い出した様に顔を仰いだ。

「葉子がカフェ開いたんだつて、しかも海に近いところで」

「え、そうなの？」

突然の報告に驚く。企業して社長をしている友人は僅かに周りにいたが、店を自分で出した友人は初めてだ。結婚して自宅と併設してみたいだよ。へえ、ちよつと行つてみたいという気持ちが出た。折角だし遊びに行つてみたら、と勧めてくれた悠里に最寄り駅と詳しい住所を聞くとじゃあ私そろそろ帰るね、と鞆を肩に掛けて行つた。ありがとう、と述べて玄関の扉を締めて溜め息を吐いた。最近は何をしても疲れやすくなつた気がする。年齢的なもので誰もが通る道なのだろうか。

流石にすぐに有給を取ることではできなかったため、週末の日曜日にすつかり足が遠退いていた東京駅まで行つて車両編成の長い長距離電車に乗つて頭を窓に預けて流れる景色をぼんやり眺めながら1時間程過ごした。そこから地元の

ローカル線に乗り換えて15分。軽い小旅行だな、と痛くなつた身体を伸ばして無人の改札を出ると塩の匂いがして踏切の向こうに海が見えた。本当に少し遠くまで来たことに感動して思わず笑みがこぼれる。

「わざわざ遠くまでありがとう」

ミルクティーの入つた深緑の大きなマグカップを運んでくれた葉子はなんだか前よりもずつと落ち着いて穏やかな雰囲気を感じてた。開店祝いの差し入れを渡して、海の近くで生活するようにになると穏やかになれるのかなとぼんやり思った。カップもミルクティーもしっかり温かくて寒さが身にしみる晩秋には丁度良い温度だつた。

「疲れた顔してる」

葉子は笑いながら三角巾を外してカウンター席の隣に腰掛けた。良かつたら一緒に食べよう、と差し入れて持ってきたロールケーキを切り分けてくれた。

「色々有つたんだね、深みの有る顔つきになつた」

「そうかな。確かに仕事は残業が多いけど苦痛ではないし、休みの日は寝たり出掛けたりもするけどこれといった出来事は最近無いけどな」

「そうなの、と静かな声が響いた。店内はL字型のカウンター席とテーブル席が4つ、テラス席も2つ有つたが最近海風がすつかり寒くなつてきてあまり利用する客はいないと言う。ケーキにフォークを刺しながら最近の生活を思い出してみたら特にこれと言つた出来事は無かつた。」

「この間ね、ひさしぶりに連休作つて実家に帰つたの」

「へえ、実家嫌いじゃなかつたっけ。珍しいね」

「うん。なんか最近実家のこととか親のこととか考えるようになって。向こうではもう雪がちらつてたよ」

東京はまだぎりぎり秋の境目にいるのに、東北の山の方はもう雪が降るのか。そういうえば一昨年くらいにこれくらいの時期に青森の方まで泊まりに行つたっけ。その時も日中でも肌に突き刺す様な寒さだつたことを思い出した。

「ここよりもっと静かでしん、として、そのまま死んじゃうんじゃないかなつて思った」

静かな部屋の中で布団に横になつて窓の外の青い空を見たことを思い出した。あの頃は今とはもつと違うところにおいて、2年前で仕事もまだ軌道に乗る前であんなに毎日生活することに精一杯だつたのを思い出した。残業は今と同じくらい有つたけれども、心の余裕がまったく違って日々生活していたというよりは日々をなんとかやり過ごしていた、と言う方が正しい気がする。そんな生活の

ふつと空いた連休で急に静かな場所へ飛ばされて、慌ただしい日常はどこにも無いのに頭の中には有って、だけど周りはいつも触れている世界とはまるで違う空間みたいで静かで、このまま死ねたらいいだろうなと考えていた。葉子も同じ様に思ったのだろうか。

紅茶を飲み終えてまた来ることを葉子に告げてふらふら歩きながら、頭の中でまた青森に行くことを決めていた。お金が溜まってきたから新幹線を予約して、次は事前に有給を申請してまたあの旅館に泊まりに行こう。変わり始めた空の色を海面が映し出していて光が眩しい。砂浜には地元の人が大きな犬を連れていたり、海まで遊びに来た学生らしき集団がはしゃいでいた。砂浜までは降りずに少しの間ぼんやり眺めて肌寒さに負けて帰ることにした。

平日の新幹線は流石に空いていて、上野駅で買った駅弁をゆつくり食べながら流れる景色を眺めていた。うとうとしながら寝て覚めて本をすこしだけ読んで、というサイクルを何度か繰り返しているうちにあつという間に新青森駅に到着した。予約していたシャトルバスに名前を告げて乗り込むと先に夫婦らしき1組の旅行客がいて楽しそうに会話を交わっていた。バスは私を乗せるとすぐに発車した。平日の初冬、東北の山奥に泊まりに来る客は珍しいのかなと思いつつ窓の外に流れる景色を見ていた。一昨年訪れた時とは異なり、鮮やかな紅葉はすっかり色褪せていて車の中でもしつかりした厚手のコートを着て来て良かったと思う程肌寒い。バスは青森駅を経由して更に1組の若い男女を乗せると1時間強で宿に着いた。バスから降りて荷物を受け取り、すっかり凝った身体をぐぐつと伸ばして力を放す。新幹線を使ってもここまで来るだけで5時間。文明がどんなに発達しても都会から山奥までは随分な隔たりがあるのだと感じる。フロントでカードキーを買って305号室に辿り着いた瞬間、真っ白なベッドの上にそのまま倒れ込んだ。部屋のベッドとは大違いなのが流石旅館といったところだ、ふかふかで気持ちが良い。頭の隅で夕食の時間までこのまま眠ってしまうことを決めてコートを着たまま意識を飛ばした。

食べ切れない程の夕食を堪能し、お腹が人生史上最も破裂しそうなくらい膨らんで子供でも産めそうな気がした。苦しみのあまりこのまま露天風呂に入ろうものなら熱さでのぼせて中身が出てきそうな危険を感じたのですこし外を散歩することにした。一旦部屋に戻ってコートとカードキーだけを持ってふらふらしながらゆつくり外へ向かう。フロントの出入り口の辺りからひやつとした風を足元に感じて外に出ると全身に冷たい空気が触れた。ちよつと寒い気がするがご飯を食べて上がった体温には気持ちが良い。山奥なので周りは当然何も

無く真つ暗で駐車場に大型バスが6台と普通車がちらほら停まっているだけ。人の数よりも澄み切った夜空にある星の数の数の方が多いのではないだろうかと思うくらい無数の星が輝いている。星を見るのも空を見上げるのも随分久しぶりな気がしてすぐに首が痛くなった。無事に取れた有給を使って平日に来れたが、休日だったらもつと人がいたのかなと想像する。騒がしいのが好きではないので平日に一人でゆつくりした時間を過ごせるのは贅沢だ。駐車場に有る時計台は8時18分くらいを差していて、今頃だったら暗くなつた会社で白熱灯の光に当たりながらかたかたと高速でキーボードを叩いているはずなのに今日の私は本州最北端の山奥にいて人が入れ替わつたみたいによつたりぶらぶらしている。

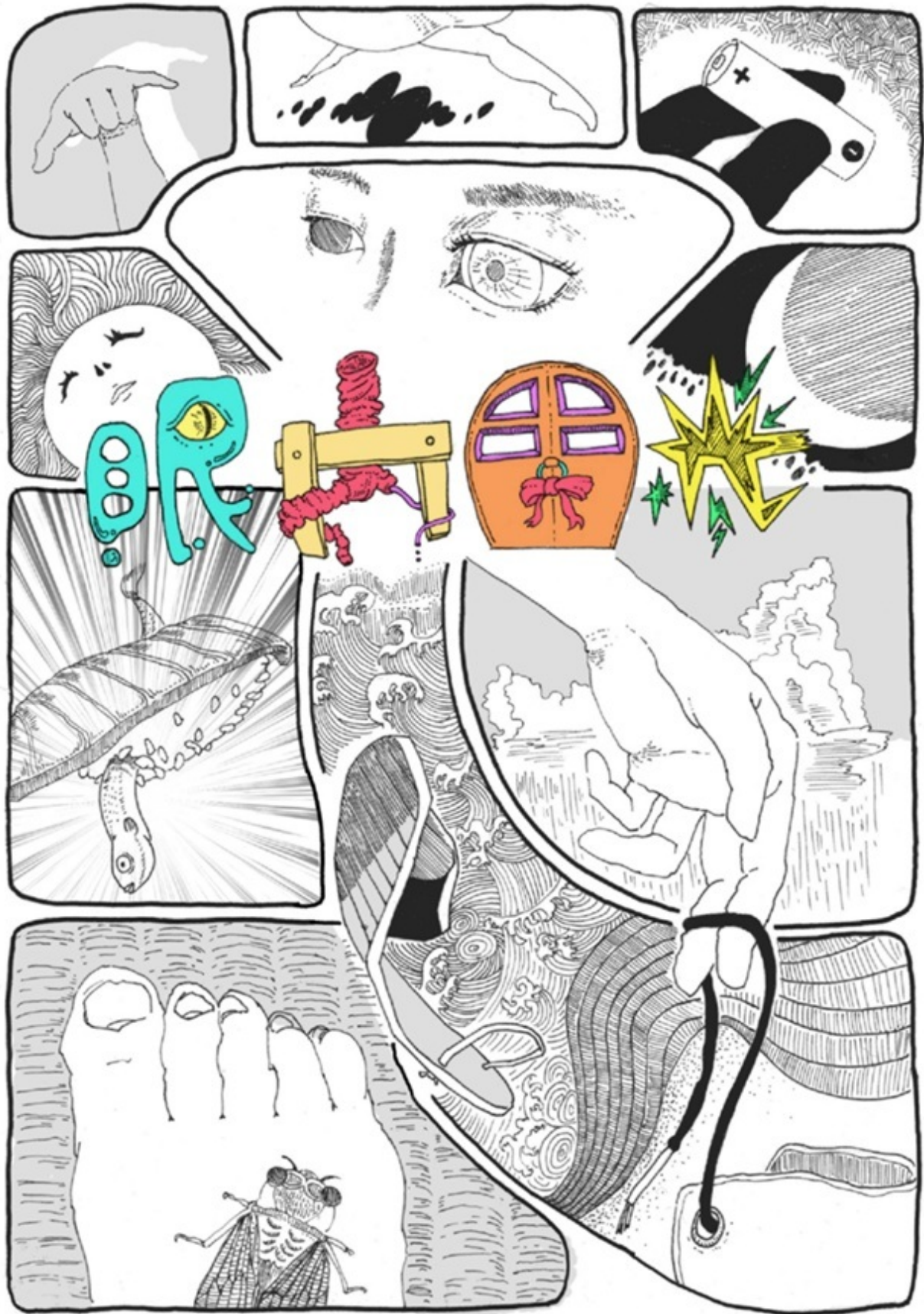
肌寒くなるまで外をぶらりとして、人の少ない大浴場で温泉にいつもよりもうんと長めに浸かって部屋に戻った。色々なしがらみから離れて毎日ゆつくりした時間の中にも落ち着かなくていつか飽きてしまうだろうと思うなら、慌ただしい日常の中に沈んだ様に生活をして、日曜日という唯一羽を伸ばせる日には水中から出て呼吸をするような生活の方が相応しいのだろうか。考えるだけでは勿論わからなくて、だからこそ人は実行して試すのだからけれど今の私にはあまり力が残っていないような気がした。ベッドに仰向けになつて天をぼんやり見つめながら時間を過ごす。明後日にはまたいつも通り6時半には起きて顔を洗って歯を磨いて支度をし、満員電車で1時間揺られて駅前の十階建てのビルの中に当たり前の様に足を踏み入れて与えられたデスクでパソコンを立ち上げて自分で決めたパスワードを入れてキーボードを叩き始める。すつかり頭に叩き込まれたやり方で処理をしていって、お昼が過ぎてしまえばあとはひたすら夜になるまでパソコンと7時間は向かい合う。椅子に座ってキーボードを叩きながらたまに受話器を耳と肩の間に挟みながら仕事をしているだけの筈なのに身体はへとへとになる。だけど会社のビルを出た瞬間、地下鉄のホームへ降りる階段を1段降りる度に呪縛から解き放たれた心地がどんどん強くなる感じが好きだと思う。むくりと身体を起こして窓の傍まで寄つてみた。薄いレースカーテンをめくると白銀の世界を期待していたがそんなことは当然まだ無くて、ただ白い細かい紙屑の様なものがちらちら舞っているのが見えた。雪だ。空の方を見るとひらひらと白い小さな粒が次々に降りて来る。ああ、もう、確実に冬が来ていることを思い知らされた。





2014, Aug. 29 / Yuki TAKAGI

PHOSPHENE : A phenomenon characterized by the experience of seeing light without light actually entering the eye.



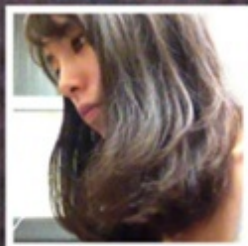
2014, Sep. 01 / Yuki TAKAGI

眼内閃光（がんないせんこう）：眼を閉じたときに眼球を圧迫するなどして網膜を刺激することによって光が眼に差し込んでいないのに光の知覚が生まれる現象。



Kaito TAKEUCHI (<http://www.flickr.com/photos/19890729/>)

大学在学中より本格的に写真を撮り始める。当時同じクラスにいた The Plashments のフロントマンと出会い、彼らのライブ撮影を始める。以後東京を中心に様々なバンドのライブ・オフショット・スチール写真などを撮影。写真展は過去に下北沢や横浜市黄金町など。イギリスでは地元 Bradford のラジオ局にてライブ撮影、またアートマガジン HowDo?! Magazine の Contributor であり、The Impressions Gallery の New Focus Team でカメラマンを務める。G.A. の創設以来のメンバーであり、イギリスでも International G.A. としてその活動を継続している。Flickr にて過去の作品を掲載している。



Naomi MINAMI

1990年2月生まれ。都内で会社員しながらマイペースに生きてる。
水面下に有るものをはやく引き上げたい。



Yuki TAKAGI (<http://yukism253.blog134.fc2.com/>)

1988年12月生まれ。悔しいけど昭和生まれ。

石川県金沢市在住。現在フリーター。

作業環境：Mac OS X 10.6.8

Photoshop CS5 / InDesign CS5

Wacom Bamboo

Tinnitus vol.3

2014 October (<http://tinnitusiii.wix.com/home>)

Cover photograph by Kaito TAKEUCHI

<http://www.flickr.com/photos/19890729>

Edited by Yuki TAKAGI

<http://yukism253.blog134.fc2.com/>

CONTACT: tinnitus.iii@gmail.com



photograph by Kaito TAKEUCHI

Tinnitus vol.3

<http://p.booklog.jp/book/90937>

Tinnitus vol.2

<http://p.booklog.jp/book/84132>

Tinnitus vol.1

<http://p.booklog.jp/book/74946>

Kaito TAKEUCHI

<http://www.flickr.com/photos/19890729>

Naomi MINAMI

Yuki TAKAGI

<http://yukism253.blog134.fc2.com/>

find out more about Tinnitus

<http://tinnitusiii.wix.com/home>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ